スポーツで、もっと、幸せな国へ。Jリーグ百年構想

OFFICIAL NEWS LETTER

J.LEAGUE

28 Nov. 2014 Vol.222

J.LEAGUE™ NEWS

広島に見事な逆転勝ちを収め、Ｊ２から昇格して1シーズン目でビッグタイトルを獲得したＧ大阪

ガンバ大阪が7年ぶり2度目の優勝

決勝のMVP賞はFWパトリック（Ｇ大阪）が獲得。ニューヒーロー賞はFW宇佐美貴史（Ｇ大阪）が受賞

２０１４Ｊリーグヤマザキナビスコカップ決勝が11月8日、3万8126人の入場者を集めた埼玉スタジアム２００２を舞台に開催され、ガンバ大阪がサンフレッチェ広島を逆転で3−2と破り、7年ぶり2度目の優勝を飾った。Ｇ大阪には優勝賞金1億円、Ｊリーグカップ（チェアマン杯）、ヤマザキナビスコカップ（スポンサー杯）、メダルが授与された。広島には準優勝賞金5千万円、Ｊリーグ楯、メダルが授けられた。準決勝で敗れた柏レイソル、川崎フロンターレには、共に3位の賞金2千万円が贈られた。また、決勝のMVP賞はFWパトリック、ニューヒーロー賞はFW宇佐美貴史と、いずれもＧ大阪の選手が受賞した。（2〜3ページに関連記事）

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS

Calbee　Canon　KONAMI　AIDEM　Coca-Cola　JCB　明治安田生命

J.LEAGUE™ 100 YEAR VISION PARTNER: 朝日新聞
J.LEAGUE™ FAIRPLAY PARTNER: 東京エレクトロン
LEAGUE CUP SPONSOR: ヤマザキナビスコ
SUPER CUP SPONSOR: FUJI xerox
J.LEAGUE™ OFFICIAL EQUIPMENT PARTNER: adidas
J.LEAGUE™ OFFICIAL BROADCASTING PARTNER: スカパー!
SPORTS PROMOTION PARTNER: toto
J.LEAGUE™ OFFICIAL TICKETING PARTNER: ぴあ

J3 LEAGUE™ TITLE PARTNER: 明治安田生命
J3 LEAGUE™ OFFICIAL PARTNERS: adidas　JAPAN AIRLINES
J3 LEAGUE™ OFFICIAL BROADCASTING PARTNER: スカパー!
SPORTS PROMOTION PARTNER: toto

編集・発行 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

2014 Jリーグ ヤマザキナビスコカップ FINAL

ガンバ大阪が2点差をはね返し逆転勝ち

佐藤 寿人（広島）は大会通算得点記録を更新

値千金の逆転ゴールを生み出した大森（右）と阿部の喜びがはじける。共にG大阪の好調な戦いを支えるアタッカーだ

© J.LEAGUE PHOTOS

2014年11月8日 13:10キックオフ 埼玉スタジアム2002

サンフレッチェ広島 2 ― 3 ガンバ大阪

【入場者数】3万8126人
【主審】西村 雄一
【副審】相樂 亨／大川 直也
【第4の審判員】岡部 拓人

【得点経過】
20分 1−0（広）佐藤 寿人（PK）
35分 2−0（広）佐藤 寿人
38分 2−1（大）パトリック
54分 2−2（大）パトリック
71分 2−3（大）大森 晃太郎

新しい時代の始まり

試合はサンフレッチェ広島が2点を先行し、ガンバ大阪にとっては「厳しいゲーム」（長谷川健太監督）となった。しかし、反撃は早く、2点目を許したわずか3分後の38分、「状況を見て外に流れてのプレーを意識した」というMF遠藤保仁が左サイドからクロス。「チャンスが来たら決めようと思っていた」というFWパトリックが巧みなポジション取りからヘディングシュートを決めて、1点差に迫った。

MF大森晃太郎を投入して左サイドに配し、遠藤をより後方のポジションに据える慣れ親しんだフォーメーションに戻した後半は、攻勢が増した。パトリック、MF阿部浩之のシュートが広島GK林 卓人の好セーブに阻まれた後の54分、FW宇佐美貴史が左からクロスを上げると、再びパトリックがヘディングで合わせて同点ゴールが生まれた。さらに71分、パスワークでペナルティーエリアに迫り、パトリックの短いパスを受けた阿部がワンタッチシュート。一度は林に防がれたものの、こぼれ球に詰めた大森がヘディングで押し込み、ついに逆転に成功した。

この日の出場メンバーで、2007年のJリーグヤマザキナビスコカップ初優勝を経験した遠藤、MF明神智和、FC東京で04、09年に同カップ優勝歴のあるMF今野泰幸を除けば、初めてビッグタイトルを獲得した選手たち。長谷川監督は今大会制覇の意義を「勝つことで自信をつけていく。最高の形で終わることができて、G大阪にとって大きな財産となる。新しい時代の始まり」と述べた。

また、G大阪はこの優勝によって、南米のコパ・トタル・スダメリカーナ2014の優勝チームと対戦するスルガ銀行チャンピオンシップ2015（来夏開催予定）の出場権を獲得した。

© J.LEAGUE PHOTOS

大会の通算得点記録を更新した佐藤のPK

歴史を物語る記録

初優勝を目指した広島は、4年前の大会に続き準優勝に終わった。キックオフ直後から積極的にシュートを放つなどタイトル獲得への意欲を示し、20分にFW佐藤寿人がPKで待望の先制。佐藤はヤマザキナビスコカップ通算得点数を27へ伸ばし、歴代ランキング首位に立つと、35分にも追加点をマークして広島のリードを2点に広げた。しかし、前半に1点を返され、後半に逆転を許してタイトル獲得は成らず。森保 一監督は「得点を奪った後に相手の勢いをしっかり止めて、失点を防げるようにしなくては」と反省を口にした。

ところで、決勝ではもう一つ、新たな記録が生まれた。かつてJリーグでプレーした選手が監督となって対決するのは、ヤマザキナビスコカップ決勝史上初めてである。長谷川監督は清水エスパルス、森保監督は広島で、選手として1993シーズンのJリーグ開幕カードを戦った。本大会、そしてJリーグが積み重ねてきた歴史を物語る記録といえるだろう。

2014Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝トーナメント

【準々決勝・準決勝】表右側のチーム：第1戦ホームチーム／左側のチーム：第2戦ホームチーム　【決勝】表左側のチームをホームチーム扱い

決勝のMVP賞を獲得したG大阪のパトリックが追撃の１点を決める

今野と共にチームをまとめたG大阪の遠藤。パトリックの１点目をアシストした

ビクトリーロードでさわやかに健闘をたたえ合った両チームの選手たち

恒例の無料フェイスペインティングはことしも大好評

ハーフタイムにはソーシャル・フェアプレーをアピールするバナーがスタジアム内を一周

西村主審（左から２人目）をはじめとする４人の審判団もVIP前特設ステージで表彰を受けた

ヤマザキナビスコ株式会社の飯島茂彰 代表取締役社長からヤマザキナビスコカップが遠藤の手に

決勝前のナビスコキッズバトルで子どもたちも熱い戦い

会場では東日本大震災復興支援写真展も行われた

記念撮影パネルでポーズを取るファン・サポーター

長谷川 健太監督（G大阪）

「選手が最後の最後までよく戦ってくれて、優勝できた。スタジアムに駆けつけてくれたたくさんのサポーターにタイトルをプレゼントできたことを、本当にうれしく思う。0−2になった時は『（運を）持ってないな、厳しいゲームだな』と思ったが、PKで先制された後から遠藤、今野がチームをまとめてくれたのが大きかった。前半で1点を返し、『後半はいけるぞ』という雰囲気でハーフタイムを迎えることができた。素晴らしいゲームができ、このような結果を得ることができたのは、相手があってのこと。広島が素晴らしいサッカーをしてくれたおかげ」

森保 一監督（広島）

「われわれは優勝を目指して準備し、ここにやって来たが、勝てなかったこと、優勝できなかったことを残念に思う。今日の試合に限っては敗者になったが、この決勝の舞台に勝ち上がってくるまでに、非常に苦しい戦いを総合力、団結力を持って勝ち抜いてきた。この舞台に来られたということ、選手の頑張りを誇りに思い、選手にねぎらいの言葉を掛けたい。このような素晴らしい舞台に立たせてくれた選手、選手を支えたスタッフに感謝したい。優勝したガンバ大阪の選手、スタッフ、サポーターの皆さんにおめでとうございますと伝えたい」

村井 満Ｊリーグチェアマン

「ガンバ大阪の優勝、おめでとうございます。大変見応えのある試合だった。佐藤寿人選手もヤマザキナビスコカップの通算得点記録を更新した。西日本にホームを持つクラブ同士の戦いで、初開催となる埼玉スタジアム２００２に3万8126人という多くのお客さまにご来場いただき、心から感謝したい。両クラブの首都圏の県人会の方なども、いらしていただいたことと思う。ピッチコンディションも良かった。今日は、初めてバニシング・スプレーのトライアルを実施したが、リスタートなどスムーズだったと思う」

ニューヒーロー賞は宇佐美（G大阪）が受賞

決勝でシュートする宇佐美。今や攻撃に不可欠の存在だ

２０１４Ｊリーグヤマザキナビスコカップのニューヒーロー賞は、ガンバ大阪のFW宇佐美貴史に決定した。10月31日にG大阪クラブハウスで発表会が行われた。宇佐美には賞金50万円、クリスタルオーナメント、ヤマザキナビスコ製品1年分が贈呈された。G大阪では07年のDF安田理大（現 サガン鳥栖）以来、二人目の受賞。

同賞は今大会開幕の14年3月19日時点で23歳以下の選手が対象となり、予選リーグから準決勝までの各試合会場における報道関係者の投票を基に、Ｊリーグチェアマンを含む選考委員会が選出。宇佐美はけがの影響もあり、予選リーグは6試合中2試合の出場にとどまったものの、準々決勝、準決勝は全試合に出場し、計6試合出場で得点ランキング3位の5得点をマークするなど決勝進出に貢献した。

現在22歳の宇佐美は、G大阪の育成組織に所属していた当時から上の年代で日本代表に選出され、高校2年時にはクラブ史上初となる飛び級でトップチームに昇格した。その後、ドイツのクラブでプレーし、昨シーズンに復帰。チームのＪ１リーグ昇格に大きな役割を果たし、今シーズンも好調なチームにあって攻撃の中心として活躍している。

宇佐美 貴史 コメント

「この先のキャリアにつなげていきたい」と抱負

「このような賞をいただき、僕自身まだまだ若手であり、今後に大きな未来が広がっていることを再認識できた。この先も自信を持ってチャレンジしていきたい。受賞にあたっては、チームメートや監督、コーチ、スタッフ、サポーターなど皆さんの助けがあった。本当に感謝したい」

2014 Jリーグ 月間ベストゴール／コカ・コーラ Jリーグ月間MVP

各月のＪ1リーグ戦で最も優れたゴールを表彰する「月間ベストゴール」に、10月度は川崎フロンターレのFWレナトが第30節のヴァンフォーレ甲府戦（10月26日）で16分に決めた得点が選ばれた。月間ベストゴールは、年間で最も優れたゴールに与えられる「最優秀ゴール賞」のノミネートゴールとなり、同賞は12月9日（火）に行われる２０１４Ｊリーグアウォーズで表彰される。

また、各月のリーグ戦（Ｊ1、Ｊ2）において最も活躍した選手を表彰する「コカ・コーラ Jリーグ月間MVP」は、10月度のＪ1はFW石原直樹（サンフレッチェ広島）、同Ｊ2はFW森本貴幸（ジェフユナイテッド千葉）が選出された。受賞者にはそれぞれ30万円、20万円の賞金が授与される。

受賞したレナトの得点。技術的にも難しいボレーシュートだった

10月は月間単独トップの4得点を挙げた石原

「月間MVPを狙っていたので本当にうれしい」と森本

J2リーグ戦&明治安田生命Ｊ3リーグ

大詰めを迎えたリーグ戦では、Ｊ2リーグ戦で第36節に優勝を決めた湘南ベルマーレ（前号既報）に続き、11月1日の第39節で松本山雅ＦＣがＪ1リーグ自動昇格となる2位を確定した。松本はこの日、アウェイでアビスパ福岡に2－1の勝利。残り3節で、3位のジュビロ磐田との勝点差が10と開いた。松本は1965年にチーム結成。日本フットボールリーグ（ＪＦＬ）に昇格した2010年にＪリーグ準加盟となり、12年にＪリーグへ入会してＪ2参加。当時から指揮を執る反町康治監督は「いろいろな人の力が結集して、こうした好結果を残すことができた」と、周囲の支援に感謝を述べた。

一方、同節で22位が決まったカターレ富山は、明治安田生命Ｊ3リーグへの降格が決定。第41節（11月15日）で21位確定のカマタマーレ讃岐は、Ｊ3の2位と11月30日（日）、12月7日（日）にホーム&アウェイで対戦するＪ2・Ｊ3入れ替え戦に残留を懸けることになった。

Ｊ3では、11月16日に行われた第32節でツエーゲン金沢が優勝を決めた。アウェイでＦＣ琉球を1－0で下した金沢は、1節を残して2位のＡＣ長野パルセイロとの勝点差を6に広げ、Ｊ3初代チャンピオンの座に就いた。

なお、11月19日に開催されたＪリーグ理事会で、湘南、松本のＪ1昇格、金沢のＪ2昇格が正式に承認された。

22歳以下の若手選手育成施策

Ｊリーグは11月19日に開催した理事会で、２０１４シーズンに続き、２０１５シーズンＪ3リーグ（Ｊ3）への「Ｊ3特別参加枠」として、Ｊ1・Ｊ2に所属する22歳以下の選手で構成するチーム「Ｊリーグ・アンダー２２選抜」（以下Ｊ－２２）が参加することを決定した。

1. 本件の決定に至る背景
「将来有望な22歳以下の若手選手の試合環境整備および2016年のリオデジャネイロオリンピックを目指す選手の強化」という観点から、Ｊ－22のＪ3への参加は、将来有望な選手の出場機会創出となっており、真剣勝負の場での経験は彼らの成長にとって今後も必要不可欠と判断したため、今回の結論に至った。
2. Ｊ3特別参加枠「Ｊリーグ・アンダー22選抜」のＪ3参加
（1）チーム創設の目的
・将来有望な22歳以下（Ｕ－２２）選手の試合環境を整備し、成長を促す。
・年代別の日本代表チームの強化。
（2）Ｊ3への参加
・公益財団法人 日本サッカー協会（ＪＦＡ）とＪリーグが、Ｊ－２２チームを編成。
・特別参加枠としてＪ3に参加する。
・ホーム試合は行わず、全て対戦相手の本拠地で対戦する。

Ｊリーグ入会審査（Ｊ3）結果

Ｊリーグは11月19日に開催した理事会で、Ｊ3リーグ入会を申請していたレノファ山口ＦＣに対し、入会を承認した。

レノファ山口ＦＣ	
法人名	株式会社 レノファ山口　代表取締役社長：河村 孝
設立	2013年11月1日
所在地	山口県山口市道場門前1－2－20
所属リーグ	日本フットボールリーグ（ＪＦＬ）
ホームタウン	山口市、下関市、山陽小野田市を中心とした山口県全域
ホームスタジアム	維新百年記念公園陸上競技場

国際交流基金×ＪＦＡ×Ｊリーグでアジアにおけるサッカー交流を展開

独立行政法人国際交流基金（ジャパンファウンデーション）アジアセンター、公益財団法人 日本サッカー協会（ＪＦＡ）、公益社団法人 日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）の三者は11月13日、アジアにおけるサッカー交流ならびに協働事業に関する覚書を締結した。

左から村井 満Ｊリーグチェアマン、安藤裕康国際交流基金理事長、大仁邦彌ＪＦＡ会長

■ 概要
1. アジアにおける市民同士、青少年同士の相互理解や交流の促進につながるサッカー関連事業
2. アジアにおけるサッカーのレベル向上につながる、サッカー選手、コーチ、審判、マネジメント関係者など、人材育成などへの共同取り組み
3. サッカー交流を促進する基盤を構築するための、アジアにおけるサッカー選手、コーチ、審判、マネジメント関係者など人材間のネットワーク強化
4. アジアにおける、サッカー国際交流試合、共同研修やセミナーなど協働事業

■ 今後の事業予定
・各国代表合宿の受け入れ
・日本人指導者の東南アジア各国代表チームなどへの派遣
・ＪＦＡ指導者講習会の東南アジア各国における実施
・東南アジア各国の育成年代の選手による国際大会の日本での実施
・東南アジア各国の育成年代のコーチおよびスタッフの研修受け入れ
・東南アジア各国のリーグ運営関係者、クラブスタッフ・トレーナー、メディア関係者などの日本招へいによる、リーグ運営、クラブ経営、芝管理、トレーニング、テレビをはじめとする中継技術などの実地・視察研修実施
・東南アジア各国リーグへの日本人スタッフ（マネジメントコンサルタント）派遣
・東南アジア各国での主として子ども向けサッカー教室の実施
・東南アジア各国の子ども向けＪリーグ版［よのなか］科展開　など

「朝日新聞社サッカーシンポジウム」を後援

Ｊリーグは11月19日に開催した理事会で「朝日新聞社サッカーシンポジウム」を後援することを決定した。同イベントは、Ｊリーグ百年構想パートナーの朝日新聞社が、サッカー界全体を応援する趣旨から、２０１８ ＦＩＦＡワールドカップロシア大会を目指す日本代表の課題とその土台となる国内リーグ、Ｊリーグの果たすべき役割について考えることを目的に開催する。

イベント名	朝日新聞社サッカーシンポジウム 「世界8強への道 日本代表・Ｊリーグを代表OBが徹底討論」
開催日時	2014年12月14日（日）17～19時（16時受付開始予定）
開催場所	有楽町朝日ホール
主催	朝日新聞社
主催	公益財団法人 日本サッカー協会、公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
参加人員	600人を無料招待

株式会社ブリヂストン、株式会社サガン・ドリームス共催「特別講演会」を後援

Ｊリーグは11月19日に開催した理事会で、株式会社ブリヂストンと株式会社サガン・ドリームス共催の「特別講演会」を後援することを決定した（11月25日に開催）。

Report
リポート

高まるサッカースタジアム建設の機運

エンターテインメント空間、地域活性化の中核に

大阪府吹田市
©スタジアム建設募金団体

長野県長野市
写真提供：長野市

2015年に二つのJクラブ ホームスタジアムがオープン予定

2015年に国内で二つのサッカースタジアムがオープンする。いずれもJクラブのホームスタジアム。欧州など先進施設の情報ももたらされるようになり、わが国でも理想のサッカースタジアム建設に向けた機運が各地で高まりつつある。

大阪で、長野で

J1のガンバ大阪がホームスタジアムとして使用する、大阪府吹田市に建設中の施設は、2015年秋に完成が予定されている。約140億円の建設費は寄付金によって賄われ、スタジアム建設募金団体による募金活動はことし12月末まで実施。スタジアムは完成後、吹田市に寄贈する形となる。収容数は4万人で、タッチラインから客席の最前列まで7m、ゴールラインからは同じく10mというサッカースタジアム。全ての座席は屋根でカバーされる。

こうした観戦環境の改善だけでなく、欧州やアメリカのプロスポーツで主流となる多機能性も備える。屋根にはソーラーパネルを設置してエネルギーを創出し、トイレ洗浄には雨水を再利用するなど、環境への配慮も怠りない。防災拠点としても機能し、飲食物などの備蓄倉庫の役割も果たす。また、コンコースやVIPエリアは地域イベントの開催やビジネス利用など、地域の活性化にも貢献し、新しい形の公共施設のモデルケースともなりそうだ。

一方、15年3月には、大改修を終えた南長野運動公園総合球技場の利用が再開される予定だ。2014シーズンを明治安田生命J3リーグで戦ったAC長野パルセイロのホームスタジアムとして使用する。総事業費は約80億円。収容数は1万5575人とJ1基準を満たし、スタンド全体が屋根で覆われる。屋根に設置されたソーラーパネルで、環境に配慮した設計となっている。芝生育成のために、アウェイ側ゴール裏スタンドは日照を考慮して低く、両ゴール裏スタンド下面に風道を設けて風通しを良くしている。

既存のスタジアムについても、観戦環境の整備が進行中だ。Jリーグが2012年に始めたJリーグクラブライセンス制度では、施設も重要な審査基準の一つ。各クラブはホームタウン自治体の協力を仰ぎながら改善に努力している。観戦環境は入場者数の増減にも関わるだけに、施設整備は「今後、特に注力していきたいところ」（大河正明 Jリーグ常務理事）だ。

街なかの中核拠点として

欧州のクラブでプレーする日本人選手が増え、海外サッカーへの関心が高まったこともあり、当地の先進的なサッカースタジアムが紹介される機会も多くなった。Jリーグも08年に「欧州におけるサッカースタジアムの事業構造調査」、10年に「スタジアムプロジェクト欧州視察」、そしてことし2月には「Jリーグ欧州スタジアム視察2014」を行い、クラブや自治体などの関係者と共に欧州の多機能複合的なスタジアムを訪れ、実情把握や諸データを成果として持ち帰っている。

こうした動きを反映するように、国内でも各地で理想のサッカースタジアムを整備しようという機運が高まってきた。前述の二つのスタジアムの他にも、新設や大規模改修が具体化、あるいは構想が持ち上がっている。

スタジアムは用地確保、経費など、計画から建設、完成後の運用に至るまでさまざまな機関が関わり、スポーツ団体だけでなく自治体、地域住民、経済界、投資家など多方面の協力者を必要とする、一朝一夕に完成する施設ではない。今後は単なる競技施設ではなく、地域に求められる街なかの拠点としての価値が問われる時代。観戦する人々にエンターテインメントを提供すると共に、地域活性化の核、シンボルとなることが理想だろう。

「全面屋根付きのサッカースタジアムを増やしたい。多目的で商業施設があって、サッカーを含めて一日楽しめる空間づくりを」とJリーグの村井　満チェアマン。Jリーグはこうしたスタジアム創出に向けた研究、啓蒙などに、今後も力を入れていく。

アメリカのプロスポーツスタジアム視察

Jリーグはことし10月、ニューヨークを中心としたアメリカ東海岸で、アリーナ施設を含む5種類のプロスポーツの7施設の視察を実施。スタジアム建設の背景と運用について、アメリカの人気プロスポーツの事例を調査した。

建設費用は、使用クラブのプライベートファンド、クラブオーナーの出資、地方債や市債の発行による投資など形態はさまざま。土地はほとんどが自治体所有でクラブへリース。スタジアム運営はクラブまたはクラブ出資会社、第3セクター、あるいはマディソンスクエアガーデンのように自社ホールディングカンパニーが行う。

各施設は店舗の併設や、コンサート、イベントへの利用など多目的使用が可能な形状。ホームクラブの公式試合以外に年間100日以上の稼働がある施設が多く、施設自体が収益を上げる仕組みとなっている。

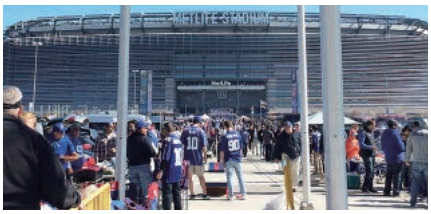
歴史の古いクラブでもリニューアル（新築または改修）して観戦環境を改善し、進化を続けている。また、スタジアムを軸とした都市開発を前提に建設された施設もあり、地域の核として欠かせない存在となっている。

視察を終えて　Jリーグ常務理事　大河 正明

欧州と違いサッカー文化の歴史が浅いアメリカで、事業規模を拡大しているメジャーリーグサッカーがどのような位置付けか、また、スポーツエンターテインメントの舞台として観戦環境が整う同国のスポーツ施設を視察した。

スタジアムについては、クラブの意向が設計に反映されるため、ホスピタリティーやエンターテインメント性に富み、それによりクラブの運営経費を賄う収益性のある施設が可能となっていた。そうした位置付けであれば、単なる箱ものではなく、例えば街づくりと連動した大規模商業施設との一体化、あるいはスポーツジムや医療モール（予防やリハビリ施設など）の併設による健康拠点化といった可能性も考えられるだろう。

アメリカでの初期投資は、民間の資金を投入するレベニューボンドなどの仕組みがある。日本でも、民間が事業主体としてその資金やノウハウを生かし、公共事業を行うPFI方式など、クラブ自体が事業運営権を獲得して成り立つような仕組みも早急に検討し、実現を目指したい。



NFL（ナショナルフットボールリーグ）の試合前にバーベキューを楽しむ。スタジアムには試合以外の楽しみもあふれる

スペシャル対談

村井 満 × 佐藤 真海

Jリーグ チェアマン　パラリンピック陸上競技選手

誰もが、好きなスポーツを、いつでも楽しむことができる。「豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与」を理念の一つに掲げるJリーグが目指す、理想のスポーツ環境だ。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催決定は、国全体でスポーツの在り方を考え、前進する好機到来といえるだろう。Jリーグの進むべき方向を常に模索する村井 満チェアマンが、パラリンピック3大会連続出場のアスリート、佐藤真海さんと、理想の実現について語り合った。 取材／構成 スポーツライター 増島 みどり

※この対談は2014年10月22日に実施しました。

PROFILE

佐藤 真海（さとう まみ） 宮城県気仙沼市出身。早稲田大学卒業後からサントリーホールディングス株式会社に勤務。2001年に骨肉腫を発症し、02年に右足膝下を切断して義足生活に。治療、リハビリ後、走り幅跳びで04年アテネ大会から3大会連続出場。自己記録は5m02。昨年9月の国際オリンピック委員会（IOC）総会ではプレゼンターとしてスピーチを行い、20年東京オリンピック・パラリンピック招致に貢献した。2013 Jリーグアウォーズでは最優秀選手賞のプレゼンターを務めた。パラリンピックを広める活動を行い、著書に「ラッキーガール」文庫本（集英社）などがある。

プレゼン成功の秘訣は「出る杭（くい）」になること

村井　お会いして本当に印象的なのは、真海ちゃんの自然な笑顔です。初対面でも、そのすてきな笑顔のおかげで真海ちゃん、と親しみを込めて呼んでしまう。東京オリンピック・パラリンピックの招致を成功に導いた、あの素晴らしく堂々としたスピーチには胸を打たれました。実は私、スピーチもプレゼンも大嫌いなんです。以前、ある取材で「もし生まれ変わったら何になりたいか」と聞かれ、今度はスピーチのない国に生まれたい、と答えました。どうしたらあんなスピーチができるようになりますか。

佐藤　本当ですか。スピーチをされる機会も多く、慣れていらっしゃると想像していました。秘訣があるとすれば、恥ずかしさを忘れて振る舞う。それに尽きます。

村井　確かに日本人は恥ずかしさや、英語は正しいのかな、といったテクニックが気になってしまう面がある。私も会社員時代、香港で外国人の中で仕事をした経験があります。自分ではものすごくにこやかな笑顔で話しているつもりが、実際には相手に伝わっていないケースもある。やはり日本人にとって自然な笑顔は実に難しい。うらやましいなぁ。

佐藤　「プレゼンやスピーチとは、自分の殻を破る作業なんだ」と、東京招致のアドバイザーだったマーティン・ニューマンさんに教えられました。日本では、子どものころに自分の意見を人に伝える、主張するといった教育はしませんね。幼少からプレゼン慣れしている外国の方々と、招致活動で突然、大舞台に立ったのでは経験値が全く違います。

――ニューマン氏は日本のことわざを引用して佐藤さんたちを激励していました。

佐藤　「出るくいは打たれる、のを恐れるのではなく、世界に東京開催を訴えるなら、ぜひとも自ら出るくいになってください」と。

村井　それを聞いて理解できました。あのプレゼンで印象的だったのは、一人の、若い女性が、自分自身の体験、それはとても辛い体験までも自然にアピールした強さだった。日本的にはあまり考えられなかった表現で、それこそ殻を破って出るくいになる覚悟ですね。皆、それに勇気付けられた。

佐藤　私は東北出身ですから、本当は話すのが苦手です。スピーチの練習自体は、1週間、それも一日1時間の集中型でした。こうしたトレーニング以上に私の支えとなっていたのは、一昨年から一人で海外転戦して得た経験かもしれません。欧米だけではなくブラジルや中東も一人で旅行、出場手配をする中で、さまざまな人たちと交流し、生活や習慣に触れ、日本や、もしかしたら自分の中にも、凝り固まった何かがあると意識できました。例えば、両足義足の女の子がとてもおしゃれな短パンとジャージーで街から試合に行く。彼女も自然ですし、周囲も好奇の目など向けない。国内で暮らすだけでは分からなかった感覚で、それが自信になったと思います。

本当のバリアフリーとは

村井　多分、それがこの対談の大きなテーマでしょうね。つまり、人種も障がいも一つの個性にすぎないといえる社会かどうかです。再び香港での経験ですが、言語も価値観も能力も皆違う環境で、同じ仕事をするから面白い。スポーツは、社会の枠や違いを取り払って皆が一緒に楽しめる。そこに障がい者も健常者もないし、凝り固まった社会を柔軟に、突破する力がスポーツにはあるはずです。

佐藤　日本では、スポーツでも健常者と障がい者は組織や政治的仕組みでも分けられています。障がい者スポーツは厚生労働省、競技スポーツは文部科学省が管轄してきました。招致が決まって変化の兆しはありますが、障がい者スポーツと呼ばれるたびにもどかしさも感じます。私はただ競技者としてスポーツを楽しんでいるのに、足や手を失ったのに諦めず頑張っていて偉いと、「感動の物語」になってしまうのも違和感がありますね。

――ロンドンオリンピック閉会式の前日、「オリンピックよ、ウオーミングアップ（前座）ありがとう」と、パラリンピックにシフトする看板を見て衝撃を受けました。競技はこれからが本番、というわけです。8万人の陸上競技場の切符も完売でした。

村井　社会でスポーツを育て、楽しむ。かつてはインフラの整備や国際化がテーマだったオリンピックも、2020年には、日本全体がこうした根源的な幸せを共有するきっかけに変わるかもしれない。

佐藤　ロンドンも最初から成功していたのではないと聞いています。招致によって日本にもようやく、理想の社会に近づくチャンスが巡ってきたと前向きに捉えていますし、パラリンピアンの声も伝わりやすくなると期待しています。

村井　先日、高齢の両親のためにバリアフリーの住宅展示場を見学したんです。重りを付けるなどして高齢者になる疑似体験をすると、この位置に手すりがないと歩けないとか、キッチンの高さとか、いちいち困る。バリアフリーって何を指すかというと、相手の立場になる思いやりなんだとあらためて納得しましたね。「とりあえずバリアフリーで作っておきましたよ、はい、お使いください」と建築を整備するようでは十分じゃない。

佐藤　そのとおりだと思います。スロープがあれば全て足りるかといえばそうではありませんし、階段があっても、多くの人の手で助けられれば安全です。「心のバリアフリー」は、建築基準では測れません。誰もが暮らしやすい社会が理想ではないでしょうか。

Jリーグと障がい者スポーツ

――Jリーグはどう関わっていけるでしょう。

佐藤　ロンドンでは、デービッド・ベッカム選手がパラリンピックのPRの一環として、ブラインドサッカーを楽しむCMが流れました。ゴールを決め、皆と談笑しながら盲目の方々にさり気なく肩を貸す。長い時間をかけて啓蒙もしたそうです。ベッカム選手だから大変なインパクトと浸透ぶりで、サッカーの力は大きいと実感しました。私は今、日本代表の岡崎慎司選手と同じく、杉本龍勇さん（バルセロナオリンピック陸上男子400mリレー6位、現 法政大学教授）にランニングコーチをお願いしていて、一緒に練習するなど、トップ選手との垣根のない交流は励みになっています。

村井　昨年、Jリーグは年間4千回のホームタウン活動を行いました。1クラブが1週間に2回は行う計算で、40～50のクラブが20年に向かってパラリンピックも一つの柱に据えていくのは意義ある試みになるでしょう。Jリーグの裾野の広さは、サッカーだけではなく、Jリーグ百年構想にあるような「スポーツを愛する全ての人のため」のものです。例えば試合前に、お客さんに真海ちゃんがジャンプする姿を実際に見てもらえば、純粋にスポーツとして興味、敬意も湧くんじゃないだろうか。資金援助だけが援助ではありません。

佐藤　パラリンピアンにとって、大勢の観客の前で、たとえ15分でも緊張感を持ってパフォーマンスできれば最高の強化策です。欧米では、競技団体の多くがオリンピックとパラリンピックで統一されていますが、日本ではまだ合同で活動や強化を組織する機会は本当に少ない。私は、トップレベルでは標準的な義足での踏み切りのために、自分の体を実験台にしながら挑戦しましたが、欧米では映像分析やデータを生かすなど、科学的なアプローチも同じナショナルチームで行います。指導者や分析などの分野での人材派遣も大きな支援です。

――ロンドンオリンピックの期間、ある理系大学では、未来のパラリンピックと題して大学生がさまざまな道具、用具を開発するコンテストが大企業の支援で開かれていました。支援の形も多様です。

村井　20年の東京オリンピック・パラリンピックを成功させるのは、日本スポーツ界全体の使命ですから、行政や組織の枠を取り払った中でさまざまなアイデアを出していく思い切った策が必要になるはずです。他国にはない日本の、もの作りの技術や企業の開発力も、パラリンピックに向けての大きな推進力になるのでは。

佐藤　今の流れを一過性のものではなく、長く続けて、さらに大会後のレガシー（遺産）をも生み出したいです。

村井　真剣に努力し、真剣にパフォーマンスする姿に人々は感動する。応援したいクラブを募って、ベッカム選手のようにJリーグ選手もパラリンピックの種目を一緒にやってみるとか、私たちならではの強みをこれから生かしていきましょう。とにかく今度、真海ちゃんの練習を見学させてください。僕の走り幅跳びは1.2mくらいかなぁ。

佐藤　チェアマン、それじゃあ、踏み切りから着地する砂場まで（2m）届きません！

「スポーツは、社会の枠や違いを取り払って皆が一緒に楽しめる。そこに障がい者も健常者もない」と村井チェアマン

佐藤さんは2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催を「理想の社会に近づくチャンスが巡ってきた」と捉える

有森 裕子Ｊリーグ理事に聞く（下）

モラルやリスペクト。それを教えるのがスポーツ

前号に続き、有森裕子Ｊリーグ理事のインタビュー。自らのプロランナーとしての経験から、プロ意識についての考え方、アスリートに必要な人間力、メディアの役割などについて語ってもらった。

PROFILE

有森 裕子（ありもり ゆうこ）岡山県出身。日本体育大学卒業後、㈱リクルート入社。オリンピックの女子マラソンでは、1992年バルセロナ大会で銀メダル、96年アトランタ大会で銅メダルを獲得。2007年にプロマラソンランナーを引退。02年にアスリートのマネジメント会社「ライツ」（現 株式会社RIGHTS.）を設立し、取締役に就任。国際陸連女性委員会委員、日本陸上競技連盟理事などを歴任。10年には日本人として初めて国際オリンピック委員会（IOC）女性スポーツ賞を受賞。著書に「やめたくなったら、こう考える」（12年PHP研究所刊）など。

※このインタビューは
2014年10月1日に実施しました。

プロの看板をエネルギーに

―― Ｊクラブで講演する時は、プロ意識がテーマの中心ですか。

有森 サッカーを「ライフワークでやっているか、ライスワークでやっているか」を聞くんですね。ライフワークは楽しく長く、ちょっと頑張って勝つ。ライスワークは、食べていくための仕事。この二つの言葉を並べて初めて気付くという選手もいます。基本的にＪリーグはライスワークでなければいけないと思います。「Ｊリーグ」と付く限りは、Ｊ1からＪ3まで「仕事をするところ」という認識を持たなければ。それで「えっ」と思うようなら、どこか有志のクラブに入ってボールを蹴っていた方が楽しいよ、と。

―― プロフェッショナルという言葉は職業選手という意味もありますからね。

有森 Ｊリーグは20年を超える歴史があって、そのあたりは浸透しているでしょう。だからあえて言うまでもなく、選手を選んで獲得したり、戦力外にすることもできる。逆に、そういう厳しさの中に身を置ける選手は、幸せだと思うんですよね。だからこそ、余計に頑張ってほしい。日本では「厳しい」「仕事」といった言葉がスポーツの中で出てくると、冷めた目で見られる風潮があります。楽しくあるべき、好きであるべき、と。でも、それを仕事にできて、力を発揮して、苦しくても乗り越えられる。これが「とても楽しいよね。すごいよね」と、どうして言えないんだろうと、ずっと思っているんです。

―― プロであるからこその楽しさですね。

有森 選手たちも普通に「好きだからプレーする」と言います。それもいいんですが、でも負けたら言っちゃだめだよ、プロは、と私は思っているんです。負けた人間がその言葉を口にしたら、それは勝った人間にとても失礼です。そのくらいの厳しい意識を持てる勲章、プロという看板を背負っているんだから、それをエネルギーに戦ってほしいというのは、全てのプロ競技の選手に対して思いますね。記者会見でもエクスキューズを並べる選手がいますが、一緒に戦う選手にこれほど失礼なことはありません。そういうリスペクトを学ぶのがスポーツなのに、身に付いていないケースを見かけます。

―― 選手の人間力も問われますね。

有森 このあたりは思い入れが強いので、つい厳しくなってしまいますが、例えばアメリカでは、スポーツを続けていく上で競技力以上に人間性が重要視されます。日本のように学校のクラブ活動はないから、ある程度のところまで行ったら、自分でやりたいことを選択し、切り開いていかなければならない。そこではモラルや、人に対するリスペクトが問われます。それを教えるのがスポーツだと思っているし、そこで学ぶのは社会性なのです。チームワークはみんなと生きていくための手段、ルールを守るのは規則を守るということ。スポーツは社会の中で、さまざまなものにつながっているということです。

メディアも選手を育ててほしい

―― 選手の人間力を高める上で、メディアが果たす役割についてはいかがですか。

有森 私もメディアに育ててもらった部分が大きいですね。「あなたはランナーだけど、結果を出す、出さない以前に普通の人間、社会の普通の一員だよ」と。そのあたりはメディアの目は厳しかったです。勝者やヒーローばかりを取り上げるのではなく、その点はとても感謝しています。プロ選手の周囲ではたくさんのお金が動くようになったので、その対象がどのように成長していくかに、もう少し興味を持って、ということも発信してほしい。ギブアンドテイクの存在として、スポーツの在り方とか、大切さ、影響みたいなところも意識して、選手を育ててほしいと思います。

―― 選手もまずは社会の一員ですからね。

有森 今から6～7年前に、あるＪクラブで話をする機会があり、チームの外国人監督から「ピッチの中ではすごい存在だけど、ピッチ外では非常に小さな存在だということを理解していない。そこが若い選手たちの問題だ」と言われたことがあります。この意識はとても大事だし、そう考えて選手生活を送るのと送らないのとでは違うと、強く感じています。このような考え方は理事として、なるべく発信していきたいと考えています。これからサッカーをやりたいという子どもたちには、技術に加えて、そうあってほしいです。

―― アマチュアもプロも経験し、国内外で活躍したアスリートの有森さんならではの貴重な意見だと思います。

有森 自分が現役選手の時には、ここまで考える方ではなかったかもしれません。私は国体やインターハイに出場したこともないし、リクルートに入って1年後にようやく他の選手並みに走れるようになった選手です。強い選手たちに悔しい思いをさせられて、今に見ていろ、という期間が長かった。そういう状況の中で、いろいろ学ばせてもらった。ずっとトップクラスでいたら、厳しさを感じることなく、ちやほやされていたかもしれない。だから、こうした感覚はこれからも持ち続けたいですね。